

過程と個体

ドゥルーズ『差異と反復』の問題圏

河口 丈志

ドゥルーズの『差異と反復』(*Différence et répétition*)には、過程(*processus*)と個体(*individu*)についての問いが見られる。これらの問題にドゥルーズは1950年代から取り組んできていた。なぜ、過程と個体はドゥルーズにとって重要な問題であったのだろうか。それらは、哲学的にどのような価値を持つ問題を導入しているのだろうか。そして、「差異」と「反復」というこの書のテーマは、これらの問題についてどういう関わりがあるのだろうか。

過程と反復

過程についての思考は古くから哲学にあったが、自然について新たなアプローチが生まれた近代になると、ほぼすべての哲学的思考は過程を問題に出す。そこには、近代における思考法そのものの変革がある。近代以前には、知的探求というはある本質を把握する行為だと考えられていた。ところが近代の科学革命、あるいはそれを準備した経験論哲学においては、ものの本質ではなくその現象、つまり、それが引き起こす作用やそれがもつ性質に探求の関心が向けられた。実体(*substance*)という概念はいまや無用のものとなる。

少し遅れて、起源(*origine*)という概念も古臭いものとなった。実体のうちにある本質を認識できれば、世界の起源から終わりまで直観できるという中世的な発想が捨てられ、ものごとはその現象面における論理に従っていると考えられるようになる。いまや問題は、ものの「起源」を問うことではなく、その歴史や過程を問うことになった¹。

この二つの、超越の本質ではなく経験的現象、非歴史的起源ではなく事実における過程を重視するという考え方は、デカルト以降、人間を問いとして建てるにいたる。近代的な自然への探求心が、その方法を維持したまま人間に向けられるのである。このような文脈において、ヒュームの『人間的自然論』は書かれた。

ゆえに、彼は、自我が人間の本質であったり、感覚が精神のすべての起源であったりというような議論をしていない。確かに彼は、ものの現象面と相互関係にある感覚的印象のみが知識の源泉だと考える。しかし、印象はすべての知識や知的能力の起源ではない。精神はその歴史を持つのだ。印象は観念を生むが、諸観念は偶然に結合される。偶然になされる観念の結合というのはいわば妄想であり、知識を形成しない。人のあらゆる知識は観念の組み合わせによる。だが、その結合は偶然になされるのではなく、規則に従って恒常的に生み出されなければならない。因果性はその規則であり、偶然になされる観念の結合に規則を与え、固定された観念間の関係を作り上げる。それが知識と呼ばれるものであり、それをもとに私たちは推論をなし、行動するようになる。原因と結果の関係を元に、観念に恒常的な連合が生まれるのである。

ところが、この因果性というのはそもそも一つの観念に過ぎなかった。だが、これがいわば新たな原理として働き出すとき、精神は自然を備えたものとして形成されはじめるのである。さて、因果性を精神に与えるものは、習慣である。つまり、直接的な印象とそれに付随する観念の反復が、因果性の観念を与えるわけだ。

このように、ヒュームは、精神の形成を過程において考えた。はじめ精神は自らの内に規則、自然をもたないが、繰り返される習慣においてそれを身につける²。いったん形成された因果性の観念とその印象は、精神における原則として作用し、私たちの知覚や意識を支配するようになる。

ドゥルーズは50年代にヒュームについてこのように論じた。ここで過程と反復という問題系がすでに現れている。過程を形成するのは反復であるという発想も見られる。反復は過程についての問いに、そしてその問いは近代において提出された自然への問いにつながっている。

過程とは、自然がそうであるように、創造的なものである。

たとえば『差異と反復』では、「同じものの反復」などない、と主張されている。雨が降り続けると川が形成され、川は土壌を運び、地形を形成する。反復はそのつど異なるものとなる。言い換えれば、反復の即自というものはない。反復は、それを受け取るものにおいて必ず差異を導入する³。そして、生み出された差異が、効果(*effet*)として反復されると、今度はほかのものの原因として作用していく。反復によって生み出され、蓄積された効果(たとえば因果性)が、今度はほかのものの原理・原因として作用し、新たな結果(知識、推論、行動)を生み出していく。

こうした原因と結果の連鎖のことを、ドゥルーズは「内在(*immanence*)」と呼ぶ。原因が結果を超越しないとき、原因は結果に対して内在的である。この概念を彼はスピノザから取り出した⁴。結果がその原因に対して劣る流出因に対して、内在においては結果原因間にヒエラルキーがない。原因が卓越したものとして結果を生み出すのではなく、自らのある反映として結果をその内に生むのである。それゆえ、世界の創造物はどれも他から超越したものではなく、すべてが等しいことになる。世界が一つの主体だとすると、それは自らの多様な構成要素を自ずから生み出していくかのようだ。伝統的に、自然とは、自らの生長にほかのものを必要としないもののことだった。ドゥルーズ的な自然とは、宇宙や地球においてだけでなく、人間精神や社会経済など、歴史を持つものすべてにおいて見いだされるだろう。

個体と差異

個体についてはじめて思考したのはアリストテレスだと言われる。だが逆説的なことに、彼は「個体については学的に定義しえない」と述べた⁵。人が定義しうるのは類や種についてであり、個体についてではない。彼によると、類や種は基体(*substance*)を持つが、個は偶有性(*accident*)しかもたない。偶有性は定義になりえない。学的な意味での差異(*diaphora*)は種や類のあいだにはあるが、個と個のあいだにはないのである。たとえば、ソクラテスとプラトンはともに人間であり、彼らは偶有性においてのみ異なる

る。同じ種に属しつつ、個が個として別ものであるということは、形相を同じくしつつ、質料において異なることであるとアリストテレスは考えた。

さて、人と馬の差といった種的差異は、動物という類のうちで区分をもたらす。種的差異は類の一義性を前提にしている。これに対し、類的差異は存在のうちで区分をもたらす。存在はしかし多義的であり、おのおののカテゴリーは類比的に「存在する」と言われるに過ぎない。そして、各カテゴリーは存在の多義性のうちでヒエラルキーを構成すると考えられるようになる。詳細はともかく、個体への問いと存在論は不可分のものであった。

個体とは他と異なるものである。だが、その個体を他と分かっどんな特徴を取りだして見たところで、それらは概念的な差異であり、その個体そのものを精確に言い当てることなどはできない。言い換えれば、真に他と異なるものは概念の側にはなく、個の側にしかない。こうした問題意識の元、ドゥルーズは、存在そのものとしての差異とでも言うべき発想を持ち出す⁶。真の差異、個と個を分ける非概念的な差異とは、個のその存在だけである。個のいかなる特徴、性質も真の差異ではありえない。そのものの存在こそが他との差異なのである⁷。対他的ではない即自的な差異、それが存在である。存在とはゆえに、差異についてのみ言われるものである。個はさまざまな意味において言われる。だが、おのおのの差異について述語づけられる存在それ自体は、みな同じ意味を持つ。つまり一義的(univoque)である⁸。というのも、もし存在がみな同じ意味において言われないのだとすれば、個々の差異とはその存在ではなく、それぞれ異なるその存在の意味だということになり、論理的な無限後退に陥るからだ。ゆえ

に、各類や種によって存在の意味が異なる(存在の多義性)のではなく、すべての存在は同じ意味を持つ(存在の一義性)。各存在者は類比的にあるのではなく、すべてはいわば同じ一つの平面の上で共存していることになる。

この二つの、過程と反復、個体と差異という問題は互いに結びつく。反復とは差異を生むものである。過程とは、自らが自らと異なるものになっていくことだ。個体は過程のうちにあり、自らを差異化していくものである。また、内在と存在の一義性という一段抽象的なテーマも互いに結びつく。

『差異と反復』は、哲学の歴史において提示されてきた一見分野の異なる重要な諸々の問いを総合し、それに一つの解答を与えようとしている。その試みは、「反復」と「差異」という言葉を概念化して用いることで可能になった。反復とは過程について、差異とは個体についての問題圏に属する。差異と反復というキーワードのもとで過程と個体という巨大なプロブレマティックを整理してみると、この二つの、一方は経験論的で他方は形而上学的な問題が交わることが見えてくる。ドゥルーズ哲学のダイナミズムは、過去の哲学のある発想を概念化してほかの発想と結びつけていくところにあるが、それはあくまで、古典的で普遍的な問題を総合しつつ、かつ新たに思考していくためのものなのである。

¹ ドゥルーズによる実体批判(Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, Paris, PUF, 1968, p. 81f.)と起源批判(「ある起源は普遍的な脱根拠化のなかにすでに沈殿しているある世界の中でしか根拠を特定しない」*ibid.*, p. 261.)を参照された。

² Gilles Deleuze, *Empirisme et subjectivité. Essai sur la nature humaine selon Hume*, Paris, PUF, 1953, p. 3.

³ Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, *op. cit.*, p. 96.

⁴ Gilles Deleuze, *Spinoza et le problème de l'expression*, Paris, Minuit, 1968, p. 163.

⁵ 正確な文言は、「個々の感覚的な実体に関してなんらの定義も論証もありえない」(1040a)というもの(井隆訳、アリストテレス『形而上学(上)』岩波書店、1959年、284

ページ)。ドゥルーズによるアリストテレス論は、より専門的な議論から入っている。Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, *op. cit.*, p. 45-52.

⁶ Gilles Deleuze, « Bergson 1859-1941 », « La conception de la différence chez Bergson », *L'île déserte et autres textes. Textes et entretiens 1953-1974*, Lapoujade, D. (éd.), Paris, Minuit, 2002, p. 28-72. 50年代に発表されたこの二つのベルクソン論において、ドゥルーズは差異の概念を練り上げている。

⁷ 尤も、差異は個と個のあいだにあるばかりのものではなく、個体そのもののうちにある。ドゥルーズにおいては、個体とはすでにできあがったものとして他と比較されるものではなく、すべての潜在性を含んだ存在の地平において自らを

実現していくものである。彼の存在論は、個体が個体として形成されるさまを、類化や種別化とは異なるものとして思考するために構想されている。「存在の一義性と固体化の差異は、類比的観点からする表象における類的差異と種的差異とのつながりと同様にふかいつなかりを、表象の外で有している。」Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, *op. cit.*, p. 388.

⁸ ドゥルーズはこの「存在の一義性」(univocité de l'être)という発想を、スコトゥスやスピノザの形相的区別あるいは実在的区別について論じる際に見出している。Gilles Deleuze, *Spinoza et le problème de l'expression*, *op. cit.*, p. 54-58.